第290回　日文研フォーラム

■

火の女神と神になった男
―16世紀の井戸茶碗を中心に―

The Goddess of Fire and the Man Who Became a God:
On the 16th Century Ido Tea Bowl

■

朴 正一
PARK Jungil

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センター創設以来の事業のひとつです。海外の日本研究者と市民との交流を促進するために、原則月一回、年間十回程度、京都市内の公共スペースで、日文研を訪問中の世界さまざまな国の日本研究者に、自分の研究について自由に語ってもらい、参加者との知的交流を図ろうとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊によって、日文研フォーラムへの皆様の関心と理解がさらに深まることを願っております。

国際日本文化研究センター
所長　小松 和彦

● テーマ ●

火の女神と神になった男

――16 世紀の井戸茶碗を中心に――

The Goddess of Fire and the Man Who Became a God:
On the 16th Century Ido Tea Bowl

2015 年 6 月 11 日（木）

● 発表者 ●

朴　正一
PARK Jungil

釜山外国語大学校教授
国際日本文化研究センター 外国人研究員
Professor, Busan University of Foreign Studies
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

発表者紹介

朴　正一
PARK Jungil
釜山外国語大学校教授
国際日本文化研究センター 外国人研究員
Professor, Busan University of Foreign Studies
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略　歴

漢陽大学大学院卒（文学博士）

2003.03–2006.02	韓国日本言語文化学会理事
2007.06–2017.10	日本語ジェンダー学会評議委員、同学会韓国支部長
2008.03–2009.02	韓国日語日文学会常務理事
2010.09–2012.09	韓日日語日文学会会長
2014.09–2015.08	国際日本文化研究センター外国人研究員

著書・論文等

〈論文〉
「20 世紀開港期釜山の市街地の研究」『東北アジア文化研究』第 29 号（2011）
「日本の差別語の研究」『日本語とジェンダー』第 7 号 (2007)
〈著書〉
『差別語の意味論的研究』（釜山外大出版社，2004）
『日本語中級作文』（釜山外大出版社，2002）
『ジャパニメーションの理解』（釜山外大出版社，2002）

※発表者の肩書・略歴等はフォーラム開催時のもの

一　はじめに

十六世紀の朝鮮では、朝鮮白磁や粉青沙器を地方窯で造っていたが、その一部が日本に伝来して、茶の湯の世界で高く評価され高麗茶碗と称された。やがて十七世紀に入ると、それらを範として注文茶碗として釜山の和館などで焼かれた。高麗茶碗の一種に井戸茶碗があるが、「売立目録」を見ると、その名称も多様であって、いわゆる、大井戸、小井戸、青井戸、井戸脇というような簡単な分類ではない。大井戸茶碗、某井戸、名物茶碗、井戸茶碗、小井戸茶碗、井戸小貫入茶碗、井戸平茶碗、青井戸、などと細部分類がされている。これら「井戸」と呼称される一群の陶磁器は一体、いつごろどこで誰が造ったものなのだろうか。実際のところ、確かなことは分かっていないのが現状であると考える。

この原因のひとつは、長い間持続して記載された記録が絶対的に不足しているからだ。特に朝鮮側で書かれた資料は、井戸に関しては何も見つかっていない。そんなところから

考古学的研究の手法を使って、埋蔵文化財の調査研究による資料を基にその編年を築き上げようとする試みがなされている。ここでは、朝鮮から運び出されて日本に伝来していった井戸茶碗をテーマに「嶋井家資料」『平戸松浦家資料』『対馬宗家文庫資料絵図類等目録』に収録されている「陶磁器資料」などを使って、井戸茶碗の源流に迫ってみたい。また、十六世紀末前後に日本に渡海した、朝鮮陶工集団との関係も探求してみたい。

二　井戸茶碗の編年

十六世紀に茶人に絶賛され、武将たちに愛された井戸茶碗は昔から「一井戸、二楽、三唐津」と呼ばれるほど、絶大な評価を受けてきた。それらは、朝鮮から伝わってきたが、いつどこで誰が造ったのか明白でない。

戦国時代から安土桃山にかけて、多くの戦乱が発生している。そのことによって陶磁器の編年は中断してしまう。例えば、井戸茶碗の陶片と考えられている、一乗谷の朝倉義景邸跡から出土した井戸茶碗の陶片は、一五七三年八月十八日からの戦乱の大火により焼失したものの一部である。捨てられた年代はものによって異なっているので特定が難しいのであるが、これに関して資料と付き合わせてみると、一五四〇年代以降に造られたものと

想定される、堺の環濠遺跡で発見されたものは、青井戸の陶片だが、一六一五年の大阪夏の陣で堺が大火災になり壊滅した際のもので、これは、時間の流れを逆に捉えて、三十年ぐらい前に造られたと想定すると、一五八五年以降に造られたと推定できる。そうすると、井戸茶碗の製作期はこれら資料を土台とした時、一五四〇年頃から一五八〇年頃の間と推定できる。茶会記に井戸茶碗が登場するのは一五七〇年代だから、タイムラグを考慮して、これも製造年を一五四〇年代からと考えると、井戸茶碗の造られたのは十六世紀の中期前後から約四十年の間だと推定できると考えられている。果たして、そうだろうか。

藪内宗和の茶会の記録（一五七八）には、次のように記されている。

天正六年（一五七八年十月十五日）宗和会

井戸茶碗……

また、『山上宗二記』（一五八六―一五八八）には、次のような記載がある。

井戸茶碗是天下一の高麗茶碗、山上宗二見出て名物二十、関白様にあり、唐茶盌〔碗〕すたり

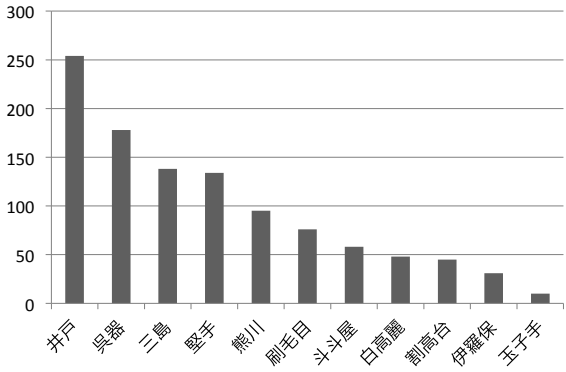
『山上宗二記』には数十の流布本があって、正月本と二月本に分かれているが、その両方に上記の記載は存在している。ここではこの点について詳しく言及しないが、山上宗二が複数の井戸茶碗の中から見立てたものが関白秀吉の手元にある、つまり、他にも複数の井戸茶碗が存在していたことが類推される。その当時の権力者や豪商の間で、非常に珍重され厳選されながらもかなりの数が存在していたと思われるのである。

秀吉期、井戸茶碗は一万石から数万石と交換されたほどだったようである。また「唐茶盌すたり」というところから、室町時代の北山文化や東山文化の頃まで茶器の中心であった唐物（からもの）、すなわち天目茶碗の位置が、この頃、茶の湯の茶会の席においては高麗茶碗に取って代わられたことが窺える。しかもその主役は、備前や信楽焼でもなく井戸茶碗であった。さらに、この点に関して、林屋晴三「茶碗変遷資料」（一九七〇）をもとに制作された松村真希子の「売立目録にみる井戸茶碗」（二〇一四）から、茶会記に散見する井戸茶碗の記載を拾っていくと、大井戸は一七〇〇年の「綱村茶会記」に、小井戸は「柳川小井戸」という記載で一七〇五年に、某井戸は一七〇三年に、井戸脇は一七〇一年にそれぞれ「綱村茶会記」に初めて見られる。また松平不味（ふまい）の所持品を十九世紀末前後に目録にした「雲州名物帳」に青井戸の名称が見られる。松村の分類資料を見ると、井戸茶碗の細分類された名称が登場するのは、江戸中期頃、すなわち、朝鮮陶磁器が盛んに茶会で使われた

十七世紀末から十八世紀初頭にかけてということだ。織豊時代に井戸茶碗が初見されてから百年近く、豪商や大名などの間で静かに息づいていたと見られる。また、大井戸茶碗が大名物（おおめいぶつ）の名を得るのも「雲州名物帳」においてである。

近代に入り、大井戸の銘「喜左衛門」が柳宗悦を中心とした働きかけによって国宝に指定されてからも、長いこと井戸茶碗は朝鮮陶磁研究の中心的テーマとはならなかった。しかし浅川伯教（のりたか）、巧兄弟などが朝鮮白磁を広く世界にも知らしめたことによって、人々の関心を深く引き付けたことには、大きな意義があった。一般に、井戸茶碗は庶民には高嶺の花であったが、それはその価格の高さによっている。しかし、価格のことに多少、言及するなら、やはり、大正期から昭和期の初めにかけて、売立が盛んに開かれたことが、その主要因となっているように考えられる。

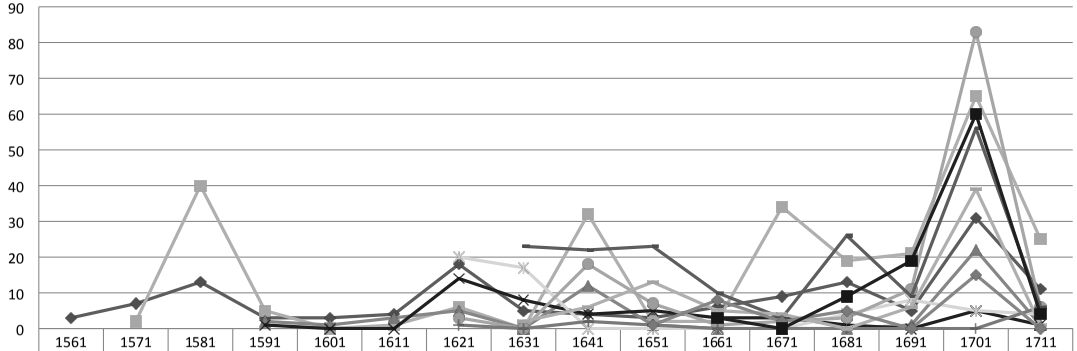
谷・申の資料を参考にグラフィック化して見ると、十七世紀初頭から末まで約八十年間の寛永文化期に、最初のピークが訪れている。茶の湯の千宗旦、小森遠州、金森宗和が活躍し、陶芸では野々村仁清が出た時代であり、戦乱の時代が完全に終焉し、平和な生活の中に新たな文化が醸成された時期と一致している。次のピークは、十七世紀の末頃から十八世紀の初頭にかけて開花した元禄文化期であり、野々村仁清や尾形乾山の作品が造られた。このような、江戸を中心とした文化の最盛期にお茶に使われる茶碗が、多種多様に



グラフ1　茶会記に表れる高麗茶碗の回数
谷・申『高麗茶碗』（2008）の中の「分類名称の出現回数とその初見」及び「高麗茶碗分類別出現数」をもとに作成した。

茶会に登場したのが分かる。ただし、この頻度はあくまでも茶会記を資料として見たもので、使用頻度が高いから、その陶磁の高麗茶碗の生産量が急激に増加したとは、確かな資料が発掘されていないので、単純に言えないだろう。しかしそれでも、十六世紀の朝鮮では、白磁や粉青沙器が地方でも生産され、白磁の日本への搬入の最盛期は十六世紀末であることが、堺の環濠遺跡（永井二〇〇九）や豊後府内における輸入陶磁器と海外交易（吉田 二〇〇九）の調査結果から明らかになってきている。

当時の日本に伝来したこれらの白磁のなかでも、特に、茶人に絶賛され、武将たちや後の大名に愛された井戸茶碗は、名物、大名物に位置する。しかし、それらは、朝鮮から伝わってきたことは知られるものの、いつどこで誰が造ったのか未だに、



	1561	1571	1581	1591	1601	1611	1621	1631	1641	1651	1661	1671	1681	1691	1701	1711
三島	3	7	13	3	3	4	18	5	4	3	6	9	13	5	31	11
井戸		2	40	5	0	1	6	0	32	2	2	34	19	21	65	25
白高麗				2	1	3	5	0	12	1	0	0	0	1	22	1
割高台				1	0	0	14	8	4	5	3	3	1	0	5	1
斗斗屋							20	17	0	0	0	0	4	8	5	4
堅手							3	0	18	7	1	2	3	11	83	6
玉子手							1	0	2	1	0	0	0	0	0	6
呉器								23	22	23	10	3	26	9	56	6
刷毛目								2	6	13	5	4	0	6	39	1
伊羅保										1	8	2	5	0	15	0
熊川											3	0	9	19	60	4

グラフ２　茶会記に表れる高麗茶碗の年度別回数
谷 · 申『高麗茶碗』（2008）の中の「分類名称の出現回数とその初見」
及び「高麗茶碗分類別出現数」をもとに作成した。

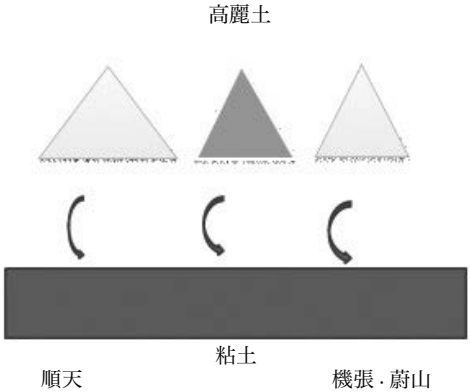


図１　半島南部の自然環境（陶磁器中心）

はっきりとはしていない。窯跡はいくつかあげられている。例えば、晋州、宝城、河東、泗川、彦陽、熊川などであるが、現在まで、韓国では、考古学的な証左となる井戸茶碗の陶片の出土がない。わずかに、日本で、伝世品として、二百数十個の全品が残されているだけで、しかも、茶の湯の世界では十八世紀以降に造られたものは、井戸茶碗と見なしていない。陶片としては、前述のように、江戸時代の武家屋敷から火災により廃棄された埋蔵陶磁器の中から一点、青井戸に属すると見られるものが出土している。また、堺の環濠遺跡から出土した陶片のひとつが、高台のないものだが、井戸茶碗のものと見られる。それに九州福岡から出土したものが残っている。北陸の戦国武将であった朝倉氏拠点の一乗谷焼け跡から出土した陶片の高台部分に、井戸茶碗の約束である景の特徴にあたる、中央の突起、兜巾（ときん）や梅花皮（かいらぎ）（釉薬が焼成の過程で縮麺状に縮れたれたもの。景色のひとつ）が見られるが、残念ながら口付けや胴の部分がなく全体像が描けない。このように日本国内でも、

わずか数点しか存在していない。

このことは、日本は消費地であったということから当然と見られるだろうが、韓国の実情と合わせて見ると、いかに江戸時代から近代、現代まで伝世品として推奨されて、井戸茶碗が厳選され、管理されてきたかということが分かる。一方、韓国の井戸茶碗と呼ばれている粗質白磁に対する関心度は、日本の状況とは対照的である。日本の侘び茶の世界を中心として、極めて高く注目されてきたことから新たな文化的評価を試みようとしているところだといえるだろう。井戸茶碗に関する歴史的、考古学的事実はまだ分からないことが多く、今後の考古学的発掘調査が期待されるところではあるが、経験的感性から想像するところを述べることにする。

井戸茶碗は、朝鮮の地方の窯で焼かれた軟質白磁が、日本の侘び茶の世界で取り立てられたものである。造った陶工が誰で、どこでいつ頃造られたものなのか、確かな記録などは見つかっていないが、歴史的背景などを考慮に入れて考察すると、十五世紀後半から十六世紀にかけて造られたのではないのかということと、慶尚南道の海岸に近い地方で焼かれ、いわゆる、大名物と呼ばれている井戸茶碗は、当時の官窯か地方窯で上質の高麗青磁などを造っていた優れた陶工の手によるものと考えられる。井戸茶碗が日本で盛んに注目を浴びたのは江戸中期頃であり、売立（うりたて）が盛況であったのは、大正期に入ってからである。

この井戸の名称は相当細分化されたものとなっており、井戸茶碗の定義を難しくさせるほど、多様な井戸が存在した。

そんな中でも、何といってもよく分からないのは、大井戸と呼ばれる井戸茶碗である。朝鮮時代は重ね焼きという方法を用いて陶磁器を焼成しており、茶碗の内側の茶溜まりと呼ばれる窪みの辺りに、重ねた碗が焼成の際、くっつかないよう高台の下に入れて挟む土の塊や砂の跡（目跡）があるが、一番の上のものにはそれがない。大井戸は、その目跡がないという特徴を持っている。また、その高台は比較的高い。これは生産者たちの指摘だが、重ね焼きの影響で一番上のものは焼成上高台を高くする必要があるということだ。小井戸でも高台の高いのは碗の内側に目跡がない。高台の低いのは、目跡が存在しているという共通点が見られる。しかし、重ね焼きの最上段に大井戸が位置するということは、大井戸の位置が非常に不安定ではないだろうか。確かに、高台が高いという特徴だけならば、慶尚南道の南側だけでも、井戸ではない他の碗にもよく見られることである。高台が高いということは、それを造った陶工が、器の大きさに対して創意工夫を凝らして辿り着いた結果が、自然と形になって現れたものではないかと考えたい。

また、伝世品の井戸には高台の畳付きには目跡があり、「喜左衛門」も「細川」も「筒井筒」もみな同じであるように見える。しかし、「目」を使わずに焼いたものなら、黒く

見える痕は一体何なのかという点が問題になるが、長い間使われる過程で釉薬が剥げ落ちたと考えられなくもない。前述の碗の内側、見込みの底には目跡がないので、重ねて焼いたのなら碗の最上部にあったものと考えられる。しかも、重ね焼きの際、各器が接触しないように適当な間をあける必要があり、焼成の向上のために、下部のものより上部のものを高台の高さを調節してより高くする必要が生じたものではないのかと考えたい。したがって、最上部に位置した「喜左衛門」や「細川」、「筒井筒」の高台は目に見えて高くなったのではないのかと考えられる。特に、「喜左衛門」の側面に残っている黒い痕は、重ね焼きのためか、あるいは一個ずつ焼いた時、横にあったものに接触したものか、いろいろ想定でき興味深い点でもある。使用された胎土は伝世品の成分分析との比較が考えられる。

もうひとつ、大井戸の名称が如何に複雑になったとしても、轆轤（ろくろ）跡は捨て去れない共通した景色である。朝鮮では、十五世紀初め頃から轆轤成形の技術が発達しているので、これが中央の官窯から地方に伝播するのに多少時間がかかるとして、やはり時期的には、井戸茶碗は十五世紀末頃に生産されたと考えられる。このように、井戸茶碗がいつ頃、造られたのかということは、具体的な資料が極度に限定されているので不明な点が多いが、歴史的背景や造る側の経験的事実によって、かなりはっきりとしてきたと思う。また、井戸茶碗の中で、大名物のひとつである「筒井筒」の箱書きには次のように記されている。

高麗井と云地に於て陶氏たる器也　距今八百年程の云ひ伝　豊臣秀吉北野大茶湯に用いたり

箱書きの期日が数字通りならば、高麗時代ということになるが、歴史的背景を考えてみると、高麗時代には井戸茶碗のような白磁は生産されていない。したがって、十五世紀頃ということになるのではないか。

三　井戸茶碗の諸相

井戸茶碗は、茶を飲むために造られたものとしては、機能的、形態的面で優れた実用性を持っている。お茶の熱さがすぐに伝わらないように適当な厚さをもち、保温性にも優れている。色彩とか形態という要素も大切だが、テクスチャー（texture）の点からは、碗の表面のビジュアル的な色や鮮明度、触った時のデコボコな感じのバリエーションは、封建支配の均質な世界また唐物茶碗の優位に変化を起こし、室町末期の茶の世界に新しいひとつの魅力を与えた。

井戸茶碗は、高麗青磁や朝鮮白磁の滑らかで美しい肌合いと均衡のある碗とは異なり、ザラザラした風合いと、不均等な外形を特徴としている。正装を第一とし、限りなく白に近いものを求めた両班（ヤンバン）たちの築いたものを正史の歴史文化と見るならば、井戸の持つ特徴は雑史の朝鮮歴史文化に属していると考えられる。

このように、庶民が手軽に日常生活の中で使用した朝鮮の陶磁器の中でも、井戸を造った陶工はごく少数であり、彼らの作風が他の陶工と違っているのが分かる。それは高台の部分や高台脇と轆轤引きの跡に特徴があるが、それ以外の粉青沙器の碗と形態上の違いはほとんどない。朝鮮陶磁器の伊羅保や粉青沙器にも、高台の辺りを除いたら、井戸の形を持ったものは多く存在しているわけで、違いが生じた理由は、おそらくは、生活の中でその使用目的によって異なったものとなったためと考える。あるいは、地域差の違いとも見られるのである。

写真１　井戸茶碗

慶尚道の南方にある伽耶津の伝統文化の流れを継いだ作風の中には、高台の高いものもあり、形も見るからに大井戸茶碗に似ている。ダム建設で水没した窯が多い慶

尚南道彦陽郡の地元の博物館が所蔵している碗の、その外形と線は、まさに井戸茶碗のそれを彷彿とさせるが、しかし、粉青沙器である。同じく、河東郡白蓮里の古窯址から発掘された朝鮮陶磁器の破片が井戸茶碗の源流だと言われているが、これも灰釉でできた粉青沙器であり、兜巾や高台の高さなど井戸との共通点はあるが、腰から高台にかけての線は、やはり、伝世品の井戸茶碗とは異なっている。これは、晋州の近くの昆陽などから見つかった陶片にも言える。

また、井戸茶碗らしき碗が絵画の世界の中で描かれている。慶尚南道陜川郡にある海印寺が所蔵する、十八世紀初期のものと見られる青緑山水画「甘露幀」に描かれている四十数個の陶磁器のうち、飲み物を仏に上げようとして祭壇に置かれている五個の器がある。描かれた時期は十八世紀初で、十六世紀の茶会記よりはるか後のものではあるが、この画に同じく描かれている象嵌様式の青粉沙器の花壺の存在との関連で、このような器物がその当時使用されていたことの貴重な裏づけ資料といえるだろう。

井戸茶碗に見られるような碗を造った陶工は、十六世紀中葉を中心として前後四十年ぐらいの時期に、それらを生産したものと推定されている。なぜなら、井戸茶碗が茶会記にその名をあらわすのは十六世紀中葉を過ぎてからであるが、造られた時期と茶会記に記された時期とは同一ではないと見るからである。井戸茶碗の編年は、伝世品と、発掘によっ

て出てきた器物とを分けて考えようとする茶道の見解と厳密には異なるものである。例えば、韓国の陶磁史での見方では、高麗時代の青磁からの流れで朝鮮時代に入ってから盛んになっていく朝鮮白磁のジャンルに含まれる、軟質粗質白磁として考えられている。韓国には日本のような茶の湯の文化は存在していない。もちろん、お茶を嗜好する文化はあり、新羅時代に中国から茶が持ち込まれ、高麗時代には茶が貴族層や寺の僧を中心に好まれていた。朝鮮時代は酒の文化が主流を占めていたが、タレー（茶礼）という礼儀作法まで生まれていた。

韓国の遺構の中からは、青磁の茶碗や粉青沙器、白磁の碗などが見つかっている。また特に興味深いことに、河東の双磎寺の近くには、新羅時代に持ち込まれた茶が植えられた茶畑が残っている。同じく、小白山脈の南端に位置している智異山の山麓には高麗時代の茶が野生化しており、朝鮮時代にできたヒャンギョー（郷校）の中で慶尚南道機張郡にあるものは、近辺に茶畑が残っている。このような事例の中から、韓国国内に井戸茶碗の使われた記録はないが、日本側に残されている様々な事項と比べて見ると、十六世紀には韓国国内のお寺で用いられていたと思われる。

ここで注目したいのは、室町時代、足利義政の時代に「わびさび」につながる東山文化が興ったが、茶の世界でも、従来の中国天目茶碗最上の風潮から、朝鮮茶碗が現れ出した

ことである。一五一〇年には室町時代の交易の朝鮮側の要衝であった塩蒲、賽蒲、釜山蒲で在朝倭人による乱があった。これは三蒲の乱と呼ばれ、これが原因で、朝鮮側は一時港を閉鎖した。特に、賽蒲は今の慶尚南道金海鎮海の熊川に倭館があり、日本人が当時大勢居住し、交易も盛んであった。初期の井戸茶碗が日本へ搬出されたとすれば，この出来事以前が好機かと考える。

二十世紀末、ウンチョン（熊川）の内陸部にある頭洞の山で井戸茶碗の陶片と思われるものが発掘された。多くの粉青沙器に混ざって、梅華皮と中央に兜巾のある高台部分も確認でき、灰青色が多いが、枇杷（びわ）色の黄色の陶片も見える。また茶溜まりらしきものも見えるが、全体的に伝世品の井戸茶碗の姿とは、何か異なっている感じを受ける。おそらくは、生産に係わる人たちなどが使うために、簡単に造ったような、雑な感じがする。

朝鮮陶磁史の変遷を見ると、十四世紀後半、高麗末期にかけて高麗青磁は全盛期を過ぎて衰え、質的にも上等でないものが生産された。青磁の象嵌（ぞうがん）技術は粉青沙器に受け継がれ、印花粉青沙器も生まれて、粉青沙器の時代が十五世紀から十六世紀にかけて登場する。刷毛目（けめ）粉青沙器は十六世紀後半ごろから増加している。井戸の生産地と考えられている慶尚南道の地方窯では、十六世紀には、灰青沙器、軟質白磁、粗質白磁などが生産されていたと見られる。初期の井戸茶碗は、この十五世紀から十六世紀の初期にかけて造られたもの

と考えたい。大名物のような伝世品の井戸はこの時期の生産物であったと想定される。したがって、前述の金海熊川のものはその後、つまり十六世紀初期を過ぎてからのものと考えられる。生産と消費を繋ぐ流通には、朝鮮と対馬とを通して、大阪、堺、京都を繋ぐ、水路を中心としたルートが考えられ、これらのルートには、日本と朝鮮の交易に深く関わった博多の商人である嶋井宗室や神谷宗湛の存在が、大きく関わっていたのではないかと考えられる。そして、堺の数寄者の茶人千宗易などが重要な接点を持っていたと考えられる。

次に、伝世品を凝視していると、その中に含蓄された魅力は尽きなく、しかも、実用面でも優れた配慮がされているのが分かる。口辺の造りは、飲みやすくなっており、見かけによらず軽量であって、適当な保温性が保たれている。朝鮮茶碗では内底が平らなものが多く、匙(さじ)を多用していたので、ご飯のような食べ物よりは液状のものを食するのに適している。茶溜まりは、高台の構造と関係があると考える。韓国の古窯地から出る陶片の中には、碗の底の部分にひびが入ったものを見かけるが、おそらくは、焼成の過程で生じるひび割れを防ぐために、底の部分を締めたことで凹(へこ)んだのではないのか。これと関連して、出土する陶片の中には高台の内側を篦(へら)で潰した跡が見られるが、これもひび割れを防ごうとしたものではないかと考える。形態的面からは、お茶を点てる時に便利なように思われ

る。とはいえ、後世の人が、その長所を見つけてお茶を喫するのに使ったのだろうという判断それ自体は、確定性を持つにいたるだけの記録がまったくない。少なくとも、当時の人々が生活のために造ろうとしたものであろうが、それが何の用途であったのかは、書かれたものが皆無の状態なので、どこまでも想像にすぎない。

いずれにしても、陶磁器が貴重であった朝鮮時代の初期に、朝鮮の高麗土を使って粉青沙器と共に造られ、その中の一部が日本に渡り、侘茶（わびちゃ）の世界で新しい価値観を生んだ。

その後、長い歳月が流れ、井戸茶碗はその謎と共に眠り続けてきた。しかし私は、おそらくは、粉青沙器と白磁が共存している時期に、日常の一般器物として造られたものと推定したいのである。韓国語の古語で碗のことを「マッサバル」呼ぶ。この「マ」とは「なんでもいいから」という意味で「サバル」は器である。精選され、選ばれぬかれ、手をかけて、几帳面にしかも均整の取れた造りではなく、一見粗雑に見え不均衡で、一見粗削りに見える感じの井戸茶碗を指しているように思える。現代韓国語にも「マッサバル」と呼称されるものがあるが、これはまさに粗雑で庶民が日常で使う容器のことである。伝世品の井戸茶碗の源流がマッサバルだとする見方があるが、いわゆるマッサバルは伝世の井戸の生産より後、初期の朝鮮陶工で、伝世品の井戸を造った職人が世を去って、かなり経った頃から造られたもので、初期のものとは異質と思われる。なぜなら、美的な見地からは、

その碗の中に限りない美しさを見出すことができるからである。それは、人工の美ではなく、自然な美しさといってもいいだろう。

朝鮮白磁の美は儒教の中からできたものであり、その影響を強く受けている。白いものを限りなく求め、もっと白いものを、さらに、正装を美しいものとする文化であった。そんな社会では、井戸茶碗のような性質の美が正史の中で評価されることはなかった。御器として取り立てられた記録もなく、ただ、庶民の日常の用に給した程度の価値であって、ステイタスが正史の席に上ることはなかった。

井戸茶碗の中の大井戸茶碗の類を、高台の高さをもって祭器だとする見解がある。朝鮮時代の初期、十四世紀以降の高麗青磁に続いて生産量が増した青粉沙器の全盛期が過ぎた十七世紀頃までの朝鮮白磁の中の祭器は、特殊器形の祭器と一般器形の祭器とに分類できる。前者は朝鮮初期において、青粉沙器で作られた特殊祭器を指し、一般の器物とは形態がまったく異なっていた。後者は、一般の日常の器物と変わらず、時期としては、十七世紀以降の俗祭や一般の民家で使用したものである。記録には、正宗の治世の一四一〇年から一四三〇年に、金属製の祭器を陶磁器で代用するようにとの王の命で、陶磁器で作られたなどとある。

したがって、朝鮮白磁の形態的特徴である高台の高さをもって祭器だとされたのは、

十八世紀以降のことで、井戸茶碗の編年の時代の中心である十六世紀には高台の低いものも祭器として存在している。十七世紀の遺物の中には、高台の低い一般祭器の中でも杯にあたるチャン（盞）があり盞台の上に置かれる。そもそも、十六世紀の祭器は十五世紀からの踏襲であり、特殊祭器を陶磁器で代用したものが見つかっているだけで、一般祭器の陶磁器の記録や出土品は現段階ではない。「祭器図説」に見える特殊祭器の陶磁器生産が行われていただろうと考えられている。この脈絡からすると、ただ高台が高いという形態上の特徴だけをもって、井戸茶碗が伝来する前は祭器だったと言うことについては編年上からも異論の多いところである。

ともあれ、井戸茶碗の中に秘められた美しさと魅力は、大名物とかって呼ばれたように、極めて高い評価を受けてきたし、最初に井戸茶碗が数寄者の手に取られたのも、井戸茶碗が持つ美的価値が重要であって、それがどんな用途に使われていたのかということからくる価値判断で使われだしたのではないと考えている。

さらに、美学的視点からだけでなく、社会の意識構造や、何よりも陶工のマインドにおいて何をもってして造ったのかという作為の点について見てみたい。朝鮮時代は儒教の影響を強く受け、陶磁器の性質にもそれが反映されている。陶磁器に関する記録は歴代の朝鮮王朝実録の中に記されており、その他の資料からも、部分的ではあるが、その様子が窺

える。しかし、こと井戸茶碗に関しては、韓国側の資料では、具体的な記述が一切ない。朝鮮時代の正史である李退磎や栗谷の流れとは別に、十八世紀頃から現れた陽明学の両班の中には、流配されて、京畿道の江華島にいた者がおり、ここに多くの陶磁器を焼いた窯が残されている。このような朝鮮王朝から疎外された両班層の中にも陶磁器を造らなかったという記録はない。仏教の僧たちの中には朝鮮時代になってから陶磁造りをした事例がすでに知られているが、彼らの中から新しい息吹を呼び起こした陶芸家が出ても不思議ではない。

以下は、どこまでも私見だが、井戸茶碗の持つ高台腰の水平方向の削り（竹節高台）と器の口辺にかけての昇り方向の線とのコントラストは、朝鮮陶磁器の独特な線とは異なっている。竹節や兜巾などは朝鮮陶磁器の中にも残されているが、線の違いは歴然としている。口造りの口辺の側面からの線が直線的ではなく、曲線的に微妙に波打っているのが見られる。井戸茶碗の口辺は均等なものではない。また、井戸茶碗では、轆轤を回して成形する時、高台から口辺に伸びる碗の形線である昇龍線が、碗の内側へと伸びる力と碗の外側へ伸びる力がバランスを保って昇って行き、限りない空間へと広がって行くように見える、いわゆる沙鉢の形を成している。高台腰の辺り、すなわち、竹節の上の辺りは、削り込みを通して出来た水平な直線が形成されている。朝鮮陶磁に見られる曲線的な線とは異

なっている。絵付けなどの装飾もなく、ただ土と釉薬と轆轤引きと焼成とによって出来る姿、形だけで出来た井戸茶碗はまさに、陶磁器の原初的な形である曲線美に、事物のもう一つの原点である直線美が融合して出来た絶妙の趣をなしているように見える。とかく単純になりやすい陶磁器に美しさと深い趣を与えるために、ぎりぎりの線だけで造り出した、自然な造形美がそこに存在している。

さらに、粉引（こひき）や、同じ井戸でも小井戸は、比較的、高台が低く、なかには古地蔵井戸のように胎土を高台から口辺まで上げていく場合もあるが、造る側の見地では、基本的に高台の形を造るために削るという行為はあっても、井戸茶碗のように鋭く削り取ったりはしないという。朝鮮陶磁器は高台腰の底の部分に胎土が多く、したがって重量が重く厚ぼったくなりがちだ。この部分を一回削り取ることで、軽量化に繋がり、胎土の節約にもなる。朝鮮時代の土は貴重であり、庶民は木製の椀を多く使用していた。土から出来た陶磁器は貴重品であった。造った当時の陶工の個人的な手の違いか、あるいは、意識的に新たな形態上の美を求めて造ったものなのか、その確定した答えはまだ出ていない。このような見方も、記録が何もない状況の中では一つの仮説にすぎないが、梅華皮が現れる原理はかなり分かってきており、高台の周辺を削ったために焼成過程で釉薬が流れ落ちて、凝結して出来たものと見られている。

このような現象の連鎖が井戸茶碗の景色の一つとして評価されていったのである。初めは、家庭で使えるものを、何かをモチーフにして造ったものだろうが、その深い趣が流通過程を通して日本の茶人の目に留まり、それを買い求める人々により、日本に渡っていったと考えられる。それが、現代まで伝世している数百個に及ぶ初期の頃の井戸茶碗なのである。

なぜ、井戸茶碗の陶片が韓国に存在しないのかという点は、生産された井戸の生産個数が限られたものであって、日常生活の中での使用を通して破損、廃棄されたためと考えられる。なおかつ、井戸茶碗が流通して、流通したものが探し買い求められた頃までには、すなわち、十六世紀の初期から中葉までの間には、すでに、初期の井戸茶碗を造った陶工は存在していなかったと考えられる。つまり、極めて短期間の出来事であったからだと考える。

焼け損じの率の低さ＋「ケンチャンタ」＋需要の低さ（家族を中心とした内集団の生活圏内を中心とした使用）

これらの要素が複合して廃棄されたものが皆無に近かったと考えられる。焼け損じの率

の低さは焼成技術に非常に長けていた陶工の存在が考えられ、還元焼成と酸化焼成の頃合いをよく知っている、十六世紀の朝鮮時代の窯の状態を知り抜いた人物が想定される。おそらくは、井戸茶碗だけではなく、必要に応じて粉青沙器や他の白磁も一緒に、登り窯の一番奥の余剰空間に納められ焼かれたものと見ることもできる。

次に、選定の段階で、その当時の「ケンチャンタ」（使えればいい）の意識が作用し、日常の生活用品として使用されていったものと考えたい。持ち出された器物の幾つかが茶人の目に留まり、狭い範囲で流通していた碗が買い求められ、その結果、朝鮮に残存する碗は極めて少数になってしまった。しかも、十六世紀末の戦乱の際、持ち出されるなどして存在しなくなった。さらに、これらの期間に、初期の陶工が世を去ってしまい、次世代の陶工がその趣を出すのが極めて難しい状態

写真２　熊川慰霊祭

になっていたのではないか。このようにいくつかのファクターによって、井戸茶碗を朝鮮で発見するのは困難を極めているのが実情である。

四　武将たちに愛された井戸茶碗

井戸茶碗の箱書きには、戦国、安土桃山時代の有名な大名の名が記されており、彼らの多くが井戸茶碗のひとつぐらいは手元に置こうとしたようだ。戦国時代の覇者を頂点として豪商の数寄人まで井戸を所望する人は多かったようだ。

武将たちに好まれたのは、織田信長から家老の柴田勝家に与えられた銘「柴田」や筒井順慶から豊臣秀吉に渡った銘「筒井筒」など、一城一国と交換されたようなステイタスもさることながら、井戸茶碗の持つ特有な色とその形態の豊かさによろう。また、大井戸の代表格である喜左衛門のような存在感や、銘「細川」のような優しさのあるものなどがあり、使う人の手に温かいぬくもりを感じさせ、心を癒してくれる、そんな感触のある感性に優れていたからだと考えられる。戦国の乱世の中で、憩いのひと時を与えてくれたのではないだろう。

数寄者の世界では、枇杷色で梅華皮を景として、好む傾向がある。また、釉薬と胎土と

焼成の結果造られた梅華皮は、その姿が日本刀の柄の皮に似てもいる。井戸茶碗が主君の地位と権威を象徴的に表す効果を持っていたばかりではなく、こんなところにも武将に好まれた要因があるのかもしれない。

五　被擄人から神へ

十六世紀末、朝鮮から連れて来られた朝鮮陶工は井戸茶碗と関連性があっただろうか。そもそも、朝鮮陶工たちが日本のセラミック文化に画期的影響を与える契機となったのは、十六世紀末の文禄慶長の役（韓国では壬辰、丁酉の乱）と考えられている。十六世紀末、慶長二年の「秀吉朱印状」の記述によると、豊臣軍に従軍した大名たちに手に技術のある朝鮮人を連れてくるように命じている。多くの大名がそれに従って、朝鮮女性の中から茶道、工芸、料理、裁縫に長けた人々を大勢連れ帰ってきた。その中に、後の日本陶磁器産業に大きな影響を与えた女性陶工がいた。

福岡武雄の領主後藤伯耆守象信は、慶尚南道の金海から優秀な陶工であった金宗伝（深海宗伝）夫婦を連れ帰り、武雄町に内田窯を開かせた。現在では有名な黒牟田焼きである。夫婦は、多くの陶工集団を連れて、九州武雄から磁器生産に合わせて有田に移り住んだ。

写真 3　百婆仙の墓

写真 4　李参平の記念碑

金宗伝の妻はとくに優れた陶工であり、夫の没後、彼女は数百名と言われている陶工集団を養い、やがては有田焼の礎になり「百婆仙（ひゃくばせん）」と呼ばれた。火の芸術でもある陶磁器の焼成にあたり、横架式ゼーゲル（粘土による耐火抗度検定）で窯の温度を測る技術をすでに会得していて、安定した陶磁器生産をすることができたと考える。百婆仙は、有田では陶磁器の母と呼ばれているそうだ。ちなみに、高麗媼という女性陶工もいたが、男性優位の職域環境で、劣悪な境遇を克服した百婆仙のような女性は類稀な存在であり、彼女の一陶工としての能力の高さを表している。

一方、同じく渡来した李参平、後の金ヶ江三兵衛にはこの技術はなかったが、泉山の磁石の発見の功などで、有田の陶山神社に神として祭られている。

日本では生前功績が大きいと死して神社に祭られることがある。韓国では、女性を祀る事例として、慶尚南道にある晋州に論介の社や義妓祠が存在し、釜山の水営川沿いにある水営鎮の遺跡の中には水営姑堂（御婆さん堂）がある。男性優位の社会制度の影響もあるが、女性が評価され名を残すのは至難の業である。日本でもアイヌ伝説に出てくるアペフチや日本神話のかまど神があるように、韓国の民間伝承にもチョワンシン（竈王神）が存在しており、女性と関係が深く、福の神と思われている。火の神の灼熱の息吹の中から、多くの陶磁器を生産し続け、朝鮮人陶工集団だけではなく、近世の日本の磁器生産に大き

写真５　義妓祠

く寄与した百婆仙をその功績を讃えて、火の女神と称したいものだ。

北九州を中心に連れてこられた大勢の朝鮮陶工たちは、その後、速い速度で生活習慣に適応していき、彼らの作風も日本の当時の消費の傾向に合わせて変化していった。十七世紀になると、東インド会社を通じたインド、ヨーロッパでの需要拡大により、おそらくは、有田、伊万里などでは、江戸三百年の時期で最大の産業的・工業的成功のひとつとされるほどの発達を示すに至った。

この日本とヨーロッパとの間の「海の道」、いわゆる「セラミックロード」が、どの程度の交易規模であったのかは、東インド会社の記録に詳細に記載されていて、日本か

ら外国に輸出された磁器の実態は、オランダ東インド会社によって公式に輸出されたものを記載した「日本商館文書」の「仕訳書」と「送り状」を根拠に、かなり明確に知ることができる。日本からの磁器輸出は、その他、私貿易や唐船貿易によるものも考えられるが、未開拓な域にあって、その重要性に比べて不明な点が多いのが実情かと思われる。

さて、それでは、彼ら朝鮮陶工たちは井戸茶碗を朝鮮にいた時から造っていたのか、あるいは日本に来るまで造っていなかったのか。この点に関して、朝鮮にいた時の記録は皆無に等しい。日本に来てから十数代続いた窯元の家系の記録に、初代の人物が朝鮮のどこから来て、日本に来てからどういう経緯を辿ったか簡単に記したものが存在しており、これを根拠に多少のことを知り得る程度である。さらに、彼らが井戸茶碗を造ったという記録は見つかっていないが、安土桃山時代の大名が御茶碗窯を造り、連れてきた朝鮮陶工に茶碗を焼かせた記録はあり、例えば、平戸御茶碗窯や唐津御茶碗窯などのように、後の藩窯の中には藩主たちのために作陶したものも存在している。

十六世紀の後半、井戸茶碗は生産されてから約百年の後、豊臣秀吉のただならぬ関心によって注目を浴びたが、初期の名物を朝鮮で見つけ出せずに、大勢の朝鮮陶工集団が連れて来られた。その後、萩などで李敬・李勺光兄弟らに井戸茶碗を造らせたと推測されているが、初期の井戸のような土が見つからず思考錯誤の連続であっただろうと考える。実は、

写真６　朝鮮陶工たちの墓

この李兄弟、そして唐津御茶碗窯の中里彦右衛門や、朝鮮にいた時、磁器所にいたといわれている中里太郎右衛門たちについても、井戸茶碗を造ったという確たる記録は存在していない。ただ、歴史的背景とか彼らのいた地方の胎土やその後の作品の姿が、例えば、萩焼や唐津焼など、井戸に繋がっているのではと思わせるものがあるということだ。実に不思議なこともあるものだ。ちなみに、十七世紀から対馬藩の経営した釜山の釜山窯でも、注文目録に井戸茶碗は一切ないし、造られた井戸も存在していない。

井戸茶碗の流通に関しては、日本側の資料すなわち、茶会記他の古文書や、最近の発掘調査によって少しずつ、その内容が明

らかになっているところもあるが、全体的な様相を把握するのにはまだ至っていないのが現状である。

他の朝鮮陶工としては、北九州の高取焼を起こした慶尚南道出身の八山（はちさん）が知られる。その他、唐津焼の高麗人又七や平戸で窯を開いた鎮海出身と言われている巨関（こせき）、高麗婆、薩摩焼の朴平意や金海など各地に分かれて窯を開いた朝鮮陶工たちの中に、井戸茶碗を造ったという人物はいなかったのか。井戸茶碗の生産者に関しては、ほとんど分かっていない。ここでは、井戸茶碗の生産者に関して、私見による経験的な印象によって述べることにする。

十六世紀末の戦乱によって日本に連れてこられた朝鮮陶工の中では、特に百婆仙の焼成のテクニックと八山の轆轤成形の技術の高さに注目したい。彼らにとっても胎土の供給の難しさが、日本での制作を困難にしたのであろうと考えられる。もしも、日本からの注文茶碗であったならば、井戸茶碗は同じ形態の規格品に近いものになっただろうと考える。

百婆仙の技術力ならば充分に井戸は焼けたと考えられるが、記録上は何も残っていない。火の芸術も当時は、消費との係わり合いを無視できなかっただろう。前述の谷の「分類名称の出現回数とその初見」及び「高麗茶碗分類別出現数」（二〇〇八）を参考にして、井戸茶碗の消費量を見た時、百婆仙の活躍した時代は、大勢の朝鮮陶工を養っていけるほど、

経済的な潤いはなかったと思われる。再生産するのにも、朝鮮の地の井戸の土が見つからなかっただろうと推定する。それとももっと他に重要な理由でもあったのだろうか。

六　結びにかえて

井戸茶碗についても言えることだが、陶磁器にとって大切なことは次のようだ。

1、土、2、釉薬、3、火、4、線

まず第一に、井戸茶碗の土は、朝鮮特有の胎土であり、日本製の器で最も、井戸に近いとされる日本の古萩の碗とも微妙な相違を見せている。朝鮮では「水土」（ムルト、自然の釉薬）と呼ばれ、胎土と関係して碗の出来栄えに影響を与える。井戸茶碗に使われた水土も、井戸が造られた場所の周辺の自然環境と相互依存的な性格を持っていたと考えられる。焼成過程も、朝鮮時代は火を管理するテクノクラートである沙器匠（サギジャン）という専門家がいて、陶工集団の中では重要視されていた。また、朝鮮時代は形を造る沙器匠、釉薬を見る沙器匠など分業化していて、仮にこれらすべてを一人でやりこなすのは、陶磁

器を知り尽くした人物でなくては成しえない。まさに、神業であると言えるだろう。

また当時、朝鮮で造られた朝鮮陶磁器においては、日本や諸外国のものと同一でなく、特異な意匠を帯びていると考える。このことは、器の線あるいはデザイン性に現われ、いわゆる光と線の総合芸術である朝鮮の器の魅力となっていると言える。その朝鮮の美が、十六世紀の茶の湯の世界で、高く評価され、新しいステイタスを獲得していった。そして、江戸期には武家を中心にして大名茶や町人茶が盛んになるなかで、井戸茶碗は、名物・大名物として伝えられていった。ここでは、どちらが先行し、起源であるかというような議論ではなく、朝鮮の陶磁器文化と日本の侘茶の文化との間で、文化の融合が創意的に行われたことを強調したい。さらに、経済産業社会の面でも、その後の江戸期中葉から本格的に始まる磁器生産と、東インド会社を通じた交易を通して、日韓両国の磁器文化がインド、ヨーロッパに伝播していき、ヨーロッパでの磁器生産に大いなる影響を与えたと言っても過言ではない。

井戸茶碗に関して、次のことが分かった。一、茶碗の製作された時期は十五世紀末から十六世紀初頭ぐらいと推定される。二、製作された古窯地は、いくつか明らかになっているが、青井戸、小井戸と呼ばれている類は鎮海の熊川でありそうだ。大井戸に関しては、朝鮮の重ね焼きの構造的理由から出来たものである。いずれも、朝鮮では粗質白磁に属す

る。三、碗の移動の経路は、水路を用いて、朝鮮の南の海岸部の地域から日本の対馬を通して、主に、博多を経て、大阪や堺や内陸京都などの消費地にもたらされていった。古窯地、生産地、消費地である日本の内外における十五世紀後半から十六世紀中葉までの今後の考古学的調査結果が期待されているところである。四、井戸茶碗を造った陶工たちに関しては、十六世紀末の戦役後、渡海して、北九州を中心に熊本や萩辺りにも定着し、陶磁器を造っていたが、やがて磁器生産が始まり、急速に日本文化化していった。そもそも、日本では古萩が一番井戸に近いと言われているが、伝世品の井戸茶碗とは趣が異なっている。また、奥唐津なども朝鮮陶磁器に近い作風であるように見られるが、戦争勃発以前から日本に来ていた朝鮮陶工によって生産されたものであり、井戸茶碗と酷似している。十六世紀末の戦乱を通して、多くの陶工たちが大移動しているが、彼らがなぜ井戸茶碗を生産しなかったのかという点に関しては、おそらく、井戸だけでは陶工集団を養っていかれなかったからだろうし、おのずから生産の隣には消費がある訳で、色付け白磁などの流行の文化コードに合わせる知恵と工夫が作用したからではないかと考える。

最後に、一見、粗放に見える朝鮮の陶磁器に秘められた美の極みを追い続けた、朝鮮陶工たちの限りない淘汰の歴史と文化に対して、語らぬところに女神の光が輝かんことを望みたい。

参考文献

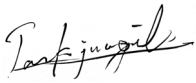
福岡市博物館編『博多の豪商――嶋井宗室展図録』福岡市博物館、一九九七年。
林屋晴三「茶碗変遷資料」『東京国立博物館紀要』第五号、一九七〇年、東京国立博物館。
加藤唐九郎編『原色陶器大辞典』淡交社、一九八六年。
金泰俊『壬辰乱과朝鮮文化의東漸』韓国研究院、一九七七年、五三頁。
高麗茶碗研究会編「高麗茶碗伝世品一覧」『高麗茶碗――論考と資料』河原書店、二〇〇三年、二八八―二九七頁。
京都大学文学部国史研究室『平戸松浦家資料』松崎印刷、一九三二年。
松村真希子「売立目録にみる井戸茶碗」『此君』第六号、根津美術館、二〇一四年。
美和弥之助「高取焼」、座右宝刊行会編『世界陶磁全集 第4江戸篇上』河出書房新社、一九五六年、二一九頁。
永井正浩「堺環濠都市遺跡における朝鮮王朝陶磁器の要素の推移」『関西近世考古学研究』一七、関西近世考古学研究会、二〇〇九年。
長崎県立歴史民俗資料館篇『対馬宗家文庫資料絵図類等目録』昭和堂、二〇一一年。
櫻庭美咲、フィアレ・シンシア『オランダ東インド会社貿易史料に見る日本磁器』九州産業大学21世紀COEプログラム、二〇〇九年。
千宗室「山上宗二記」、桑田忠親校註並びに解題『茶道古典全集』第六巻、淡交新社、一九五七年。
谷晃・甲翰均『高麗茶碗――茶人に愛された名碗の誕生』淡交社、二〇〇八年。

矢部良明編『角川日本陶磁大辞典』角川書店、二〇〇二年。
吉田豊「豊後府内における輸入陶磁器と海外交易」『関西近世考古学研究』一七、関西近世考古学研究会、二〇〇九年。

発表を終えて

十六世紀頃、かつて朝鮮白磁や粉青沙器が地方の民窯でも焼かれていた。これらの中から日本に伝わっていき、茶の湯の世界で取り立てられていったのが井戸茶碗だ。陶磁器は形を持っていても、あるものは有をもって表現され、あるものは無によって現れ出ている。井戸茶碗はまさに後者に属すると考える。造る側から見ると無作為によるものと作為が強く現れたものとがあるが、いわゆる「無作為の作為」によるものが井戸の特徴だと言えよう。清寂として、侘び寂びに相応しい風情がある。同じ茶道具でも緋襷四耳茶壺、一重口水指、種壺耳付水指、笹耳水指、胴締茶入、尻膨茶入などのようにかたちの上でも多様性に富んでいる訳でもない。それにもかかわらず、見る人使う人に深い感動を与えることができる。自然により近いものと見るものとの間に気持ちの往き来があってこそ創造される世界である。一体、どんな人が造ったのか。そしてその人たちは何処で暮らしていたのだろうか。寥々たる時の流れの中で思いをはせながら筆を置くと、彼らも土から生まれ、死んで土に還り、そして土から陶磁器を造っていた。何時しか人の人生も、そんなものなのではないかと思われてならない。

朴　正一



日文研フォーラム報告書の全文は、日文研のウェブサイトでご覧いただけます。

http://publications.nichibun.ac.jp/ja/

＊＊＊＊＊＊

発 行 日　2018年2月28日
編集発行　国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
http://www.nichibun.ac.jp/

＊＊＊＊＊＊

©2018 国際日本文化研究センター

■ 日時

2015年6月11日（木）

午後2時～4時

■ 会場

ハートピア京都

第二九〇回　火の女神と神になった男 ―16世紀の井戸茶碗を中心に―

朴　正一

国際日本文化研究センター